

提出日： 2023 年 4 月 27 日

## 研究促進期間制度 研究実績報告書

所属学部・研究科	身分	氏名
経済学部	教授	亀井伸治

研究期間	以下1～4より、取得した研究機関を選択し、該当番号を右欄にご記入ください。				
	<table border="1"><tbody><tr><td>1. 2022年4月 1日 ～ 2023年3月31日</td><td rowspan="4" style="text-align: center; vertical-align: middle;"><div style="border: 2px solid black; padding: 10px; width: 40px; margin: 0 auto;">1</div></td></tr><tr><td>2. 2022年9月 1日 ～ 2023年8月31日</td></tr><tr><td>3. 2022年4月 1日 ～ 2022年9月20日</td></tr><tr><td>4. 2022年9月21日 ～ 2023年3月31日</td></tr></tbody></table>	1. 2022年4月 1日 ～ 2023年3月31日	<div style="border: 2px solid black; padding: 10px; width: 40px; margin: 0 auto;">1</div>	2. 2022年9月 1日 ～ 2023年8月31日	3. 2022年4月 1日 ～ 2022年9月20日
1. 2022年4月 1日 ～ 2023年3月31日	<div style="border: 2px solid black; padding: 10px; width: 40px; margin: 0 auto;">1</div>				
2. 2022年9月 1日 ～ 2023年8月31日					
3. 2022年4月 1日 ～ 2022年9月20日					
4. 2022年9月21日 ～ 2023年3月31日					
活動報告	研究期間中に実施した研究活動を具体的にご記入ください。 海外活動補助費を受給した方は、海外活動の内容が分かるようにご記入ください。				
	<p>予定していた研究テーマは、十八世紀ドイツの通俗小説についてのものでした。当該研究期間では、それに関連して、2020 年度より参加している中央大学人文科学研究所の二つのチーム（「ヨーロッパ ロマン主義時代の文学・思想」、「幻想的存在の東西」）においてそれぞれ進めていた研究を纏め、最終的に論文の形にすることに主な時間と労力が費やされました。</p> <p>前者のチームでの研究は、十八世紀末の著作家カール・グローセ Carl Grosse の崇高美学論『崇高について』 <i>Ueber das Erhabene</i> (1783)を採り上げ、このあまり知られていない論考が、十八世紀末の（崇高概念についての）美学思想の中でどのように評価され、位置付けられるべきかを考察するものです。</p> <p>後者のチームでの研究は、フリードリヒ・シラー Friedrich Schiller の未完に終わった長篇小説『招霊術師、O**伯爵の回想録より』 <i>Der Geisterseher. Aus den Memoires des Grafen von O**</i> (1787-89) の補完作や摸倣作を文学史的な観点から総括し、出版当時から今日まで、このシラー作品がどのように受容されてきたかを俯瞰するものです。</p> <p>さらに、十八世紀末ドイツの女性作家ベネディクテ・ナウベルト Benedikte Naubert の小説『ウナのヘルマン、秘密法定の時代の話』 <i>Herrmann von Unna. Eine Geschichte aus den Zeiten der Vehmgerichte</i> (1788) と、作中での題材である中世の特殊な刑事法廷制度である「フェーメ」について、および、『ウナのヘルマン』の同時代の英訳と英国での反響、英文学との影響関係についての調査と研究も行いました。</p>				
得られた研究成果について	上記の研究活動の結果、得られた研究成果についてご記入ください。				
	<p>二つのチームでの研究成果としての論文はどちらも、註の整備を除いて大部のものが出来上がりました。各論文の標題は以下の通りです。</p> <p>「もうひとつの崇高美学論—カール・グローセ『崇高について』(1788)」</p> <p>「現実の中の幻想、幻想の中の現実—フリードリヒ・シラー『招霊術師』の補完作</p>				

	<p>と摸倣作綜覧」。</p> <p>ナウベルトの『ウナのヘルマン』についての研究作業もほぼ完了しました。現在は、その論文作成の段階に入っており、すでに全体の約8割以上を書き上げています（標題には、「ベネディクテ・ナウベルト『ウナのヘルマン』(1788)と、同時代のその英訳—ドイツの閨秀作家による秘密法廷の小説の十八世紀末英国における受容」を予定しています)。</p> <p>これらに加え、2022年度中には、次の仕事も行いました。</p> <p>まず、「公益社団法人ドイツ語学文学振興会」の会誌『ひろの』第62号(2022年10月)に、「あるドイツの美食本のこと」を寄稿しました。これは、美食家として知られた十九世紀の貴族軍人で著述家のオイゲン・フォン・フルスト男爵 Eugen Baron von Vaerst の『食哲学あるいは食卓の歓びについての教説』 <i>Gastrosophie oder die Lehre von den Freuden der Tafel</i> (1851) を紹介したエッセイです。</p> <p>次に、中央大学の『中央評論』74巻4号(No.322)(2023年1月)に、「恐怖や脅威は書籍と共に—十八世紀末における英独間のゴシック小説相互輸入について」を寄稿しました。これは、74巻4号の特集企画「恐怖を見積もる」のテーマに応じて書いた評論です。</p> <p>第三に、「早稲田ドイツ語学・文学会」の学会誌『Waseda Blätter (ワセダ・ブレッター)』第30号(2023年3月)中の企画「わたしの一冊」に「John Fowles. <i>The Magus</i> (1965)」を提出しました。これは、英国の作家ジョン・ファウルズの第二長篇小説『魔術師』の主題と構造について、現在の自身の研究対象のひとつである十八世紀末ドイツの秘密結社小説との関連において書いたものです。</p>
<p>今後の計画について</p>	<p>得られた成果を踏まえ、今後どのように研究を発展させる計画か、ご記入ください。</p> <p>グローセの崇高美学論についての論文と、シラーの『招霊術師』についての論文は、どちらも、中央大学人文科学研究所の叢書に載せるべく、期限の今年8月までに最終的なチェックをした上で原稿を提出する予定です。</p> <p>ナウベルトについての研究は、できれば2023年度中に、どこかの学会で研究発表し、然る後に、同内容の論文を大学の紀要ないしは学術誌に投稿します。</p> <p>また、これも以前から取り組んでいる、十八世紀末ドイツの作家イグナーツ・フェルディナント・アルノルト Ignaz Ferdinand Arnold の作品の翻訳も続けたいと考えています。今回の制度を用いて計画していた作業は、『血の染みのある肖像画』 <i>Das Bildniß mit den Blutflecken</i> (1800) と『分身のいるウルスラ会修道女』 <i>Die doppelte Ursulinernonne</i> (1800) を和訳することでした。前者については、テキスト全体の翻訳を終えることができましたが、後者については、まだ5分の1を訳すに留まっています。しかし、さらに同じ作者の『黒いヨナス』 <i>Der schwarze Jonas</i> (1805) も上記二作と併せる形での翻訳を検討しているところです。ちなみに、これら三つの作品の内容については、すでに数年前、二つの研究論文を中央大学人文学研究所紀要に発表済みであることを申し添えておきます。</p>